

令和6年度 第1回 生駒市公益活動アドバイザー会議会議録

開催日時 令和6年5月28日(火) 14:00~16:00

開催場所 生駒市役所4階401・402会議室

出席者

(アドバイザー) 佐藤由美氏、土坂のり子氏、山納洋氏(五十音順)

(事務局) 地域活力創生部長川島、市民活動推進センター所長大垣、
地域コミュニティ推進課専門官綾野、市民活動推進センター主幹佃、
市民活動推進センター係員西田

(傍聴者) 1名

案件

- 1 座長の選出
- 2 生駒市地域・社会活動創出支援事業の事業目的、経緯、内容について
- 3 令和6年度 生駒市地域・社会活動創出支援事業の申請事業に対する助言
- 4 その他

以下、発言要旨

- 1 座長の選出

佐藤由美氏が座長に選出

- 2 生駒市地域・社会活動創出支援事業の事業目的、経緯、内容について

(事務局) 【資料4について説明】

(アドバイザー) 補助率を2分の1に設定された狙い、全額精算払いという認識で合っているかどうか、消費税を対象経費から外すという設定の背景をご説明ください。

(事務局) はい。補助率を2分の1にした理由は、当初から継続を見込んで、1年目から自己財源獲得の努力をしていただきたと考えたためです。2点目は精算払いで対応しています。3点目の消費税は対象外ですが、検討課題になっています。

(アドバイザー) 先ほどの説明に、ハードルが高くて応募に気後れしてしまうという話がありました。制度設計の話と、市民側が活動する気持ちの温度にずれがあるのではな
いかと思います。制度設計を改めることよりも、市民側を温めることが先決では
ないでしょうか。

(事務局) 温めるというのは、この制度を使って応募しようという意欲を高めるということ
でよろしいですか。

(アドバイザー) もう少し前段階の話だと思いますが、例えば顔を合わせたら挨拶をするとか、
顔見知りが多いとか、助け合おうという気分を共有していることが必要ではな

いでしょうか。社会課題に取り組む視点を持たれているという状態は、非常に熱いですね。その状態をつくるには、何かのきっかけで、趣味みたいなものや共通の関心で集まって仲良くなる。「コモンズ」という言い方をしますけれども、仲間みたいな意識が生まれてくる。「そういえば、こんなことって困るよね」と話し合いをする先に「自分たちの住んでいる街は、もうちょっと良くならないのかな」とか「行政に言っても仕方がないので、自分たちで何とかしよう」というくらい温まったら、こういった制度は生きるのだと思います。ですから、コモンズを作るという取組を並走させた方がいいのではないのでしょうか。

(事務局) コモンズを作る取組は、市役所各課が事業化しています。生涯学習課や広報広聴課では一つのテーマを軸に、地域コミュニティ推進課のまちの駅という活動では地域を軸に関係性の構築をサポートしています。

(アドバイザー) こういった制度は、明確な課題やそれに取り組もうと思う人が既にいれば活用されるのではないのでしょうか。

(アドバイザー) これまで関わってきた経緯から申し上げますと、一つはこの前の制度の要件が緩かったそうですね。また、生駒市は住宅都市で、どちらかというと専業主婦率も高く、女性の力や母親同士の繋がりががあるので、そういった方たちが社会に目を向けながらおこす活動もこれまで見受けられました。ただそういった活動は、活動のための資金確保が難しい。市民の方々は社会参加がしたいというところにあり、それに対して収益を上げるようにアドバイスされるギャップがあるのだと思います。もちろん自立していける活動もありますし、活動を通じて仲間を増やしておられる事例もあります。制度にあった温め方が必要で、収益を上げて自立してもらうことを重視するなら起業的な講座と一緒にすればいいし、テーマ型の市民活動を増やしたいのであればそういった講座と一緒にすればいい。その中間みたいな位置づけが難しかったのかなと私自身は思っています。

(アドバイザー) 子どもの関係に課題意識がある方々は、子どもが大きくなると活動のモチベーションは下がって、課題に対応していくということが優先されなくなるのかもしれない。この補助金の枠組みで、起業や自立を進めても、何かニーズとのズレを感じます。

(アドバイザー) しっかりと体系ができている地縁型には、若いお母さんはなかなか入り込めないで、それならテーマ型の活動で頑張って自己実現していこうと思われているように見えています。

(事務局) 先ほどアドバイザーからご質問のあった3つの視点について、ご経験からアドバイスをいただけないでしょうか。

(アドバイザー) スタートアップの団体を支援するとき、まず精算払いは非常にハードルが高いです。年間20万円程度のお金を誰が持ち出すかについて合意が得られるような仲間作りができていないことが多いはず。「それぞれ10万円ずつ出そう

よ」といった3人が集まるわけではないので、2分の1でも先払いがあるとポジティブな感情になるのかなと思います。2分の1の補助率、さらに消費税も対象外となりますと、不要な経費まで載せていくことが多くなります。想定していない事業まで計画に入れて、必要な10万円のために、本来はやりたくない事業をしなくてはいけないとなると本末転倒です。京都府ではスタートアップには、15万円全額出しています。スタートアップが終わりますと、3分の1助成になります。例えば重点課題などのテーマを決められて、それについては3分の2助成としているような区もあります。補助率は、一律にする必要はないというのが現場にいる感覚ではあります。

(事務局) 大阪などの補助金制度もスタートアップは10分の10とか、4分の3といったところも多いので検討します。

(アドバイザー) この補助金はどのようなことに使われるのですか。

(アドバイザー) 印刷費、パンフレット類、団体として使うパソコンといった備品ではないかと思います。また、スタートアップで使う人件費は、お金がなくなった瞬間に「これ以上はできないよ」と離れていかれ自立に繋がらないケースを今まで何件か見えています。このため、人件費として現在はボランティアにかかる経費を1日最大1,000円までとされておりますが、ここを少し厚くされてはどうでしょうか。例えば1日と言っても、1時間だけの場合もあれば、6時間の場合もあります。このあたりが、最初に関わる人たちの巻き込みに少し苦慮するところではないかと思います。その他、備品が2万円以上のものを備品とされるのも、サロンなどを開催される場所にとっては非常にハードルとなるのではないのでしょうか。

(事務局) アドバイザーのお話に、生駒市民の方は社会参加したいという意識が強いというお話がありましたが、今後、市民公益活動を増やすことを目指して進めるときに、どういった活動を生んでいけたらいいのかアドバイスをいただきたいです。

(アドバイザー) 入口が社会問題の解決か、それとも自己実現かということです。生駒市の総合計画にも自己実現が叶うということは書かれていますが、この事業では、それが社会のため、他の人のためであることを強調してもらい、その活動によって生まれる効果にも目を向けてもらえたらと思います。

(事務局) 今回は申請前に、説明会の他にも過去の採択団体の方々のお話を聞いてもらう講座を企画し、好評でした。今回の申請は2件にとどまりましたが、講座には11名の方に参加してもらいましたので、残りの皆さんの事業内容の見直しにつながっているのではないかと思います。

(アドバイザー) 役所が市民に提案公募型委託事業として事業を実施してもらう制度設計がありますよね。公益活動や社会活動は当事者が手をあげることが多いですから、そんな方が少ないということなら、委託事業にするか助成の割合を上げていくことが必要です。どのような活動を市民に担ってほしいのかという制度設計以

前の話ですね。冒頭に申し上げた「温まっているかどうか」というのは、自分のお金を出してまで取り組みたい人がいるかということです。無理のない形で公共を担ってもらうような制度設計にするか、社会参加的なことを充実させるのか。それを継続させるためにはコモンズを育てることも一つの方法だと思いました。

(アドバイザー) 今回講座を受講された11人のニーズをリサーチされておくと支援方法のヒントになるのかもしれませんが。少し関わっている豊中市では公開プレゼンの場があります。そのような活動に広がれば、底上げも可能ではないかと思います。

(事務局) もう一つ質問があります。生駒市の市民活動推進センターというセンターに登録されている団体には「ボランティア活動」といわれる活動をされている方々も多いのですが、少し切り離して考えるほうがいいのでしょうか。

(アドバイザー) そうですね。ボランティア活動は、ある意味、自己肯定感を高める活動や、余暇活動の一種として実施されてきた歴史的経緯もあります。これから生駒市に必要な公益活動は、それとは一線を画すものではないかなというふうに思っています。ただ、少子高齢化が進んでくる中で、複雑化・多様化してテーマごとにどんどんカテゴライズが増えていくような活動も大切ですが、厚生労働省が重層的支援整備体制事業を強化されておられるように、横串をさせるような全てを包括するような、あるいは問題を問題と捉えないようにする、発想の転換を促す取組が出てくれば非常に面白いのかなと思います。

(アドバイザー) 神戸市長田区の六軒路あたりはおもしろいですよ。ダンスボックスというNPOが下町芸術祭を始めて地域と繋がってみたい、フリーヘルプという古着を売ってチャリティーをするようなお店ができたり。DVを受けている女性を支えるNPOや日替わり店主カフェやハッピーの家六軒という多様な人が出入りするグループホームが近い区寄りできています。すると、成功体験を共有している人たちと集団的効力感が生じます。それが温まっているということです。また、それぞれが取り組んでいる活動が、もう少し柔らかかったり開かれていたりする。例えば、ホップの木を植えて、クラフトビールをつくるといった活動も最近は公益性がありますよね。そんなことが起こるようにするにはどうしたらいいのかという視点で考えたほうが良いように思います。

3 令和6年度 生駒市地域・社会活動創出支援事業の申請事業に対する助言

(1) 正田耕一氏

【申請者から事業の説明】

(アドバイザー) どんな仲間がいらっしゃいますか。

(申請者) まず1名は里山での活動をされていた経験者の方です。例えば炭作りのような経験をお持ちです。キャンプや野外活動が好きな人やハーブ作りをしている人、草木染をしている人もいます。

- (アドバイザー) ファシリテーターやワークショップ、広報が得意みたい人はいますか。これからの里山について話し合い、解決していく機運を起こしていくような人は。
- (申請者) 今はいないです。参加者や仲間は増やしたいが、運営主体自体の人数については人数ありきではないと考えています。
- (アドバイザー) 今いる仲間を中心にプロジェクトを進める予定ですか。
- (申請者) 今いる仲間が中心にはなります。広報や活動をする中で、今の倍ぐらいの10人ぐらいにはなっているのではないかと思います。
- (アドバイザー) 土地は、個人所有地でよろしいですか。同じ人が持っていますか。
- (申請者) 耕作放棄地は3人ぐらいの地主さんがいらっやいます。今年度は山にまで取りかかれないと思います。まずは、山の手前の田と元田んぼです。
- (アドバイザー) 耕作放棄地に行くまでも他の方の所有地があって、そこにいたる道は誰のものですか。
- (申請者) 共用になります。
- (アドバイザー) 里山の活動でゆくゆく問題になるのは、土地の所有権の問題です。例えば所有者の方が亡くなられたときに、トラブルになることが多いです。特にここでテーマパークのようなものを作られるのであれば、地主のご家族の方も最初から巻き込まれておく戦略が必要なのではないかなと思います。
- (申請者) おっしゃる通りだと思います。ご家族とも面識はありますので、お声がけもして意識しながら進めていきたいと思います。
- (アドバイザー) 活動の具体的な内容としては、耕作放棄地を間伐して、地面が見えるような状態になったら有料のイベントを開催するということが書かれていますが、スケジュール感はどうなっていますか。
- (申請者) できることから順次始めていきます。まずは、タケノコは6月の半ばぐらいが最盛期ですので、2週間後ぐらいにはイベントをしようと話を進めています。
- (アドバイザー) 藪を刈ること自体をイベントにすることは考えられますか。人件費を計上されていますが。
- (申請者) 刈払機がないと難しいので、慣れた人にお願いする予定です。刈った物を片付ける作業についてはボランティアをお願いしようと思っています。
- (アドバイザー) 少人数ではなく、活動者を増やして面的に広げることが必要ですね。
- (申請者) まずは取っ掛かりとなる形をつくらないと説得力がないので、ゆくゆくは巻き込んでいきたいです。キャンプが好きな人にとっては、切った木を薪として使えますからね。
- (アドバイザー) 昔からそこに住む地元の方々と、活動されようとしている方々の接点はありますか。一緒に活動していける見通しでしょうか？
- (申請者) 今回活動する地域に関しては、皆さんご高齢です。所有されている方々ご自身では保全ができないけれど、誰かにしてもらえるのならありがたいと常々話し

ておられます。接点という面では私が畑をしており、皆さんとの面識があります。

(アドバイザー) イノシシの話は割と深刻な感じがしますが、害を防ぐってということへの取組は大事なことになるでしょうか。

(申請者) 藪を刈って開けた状態になれば、イノシシは警戒して近寄らなくなっていくと思います。イノシシ対策の一番は藪を明るくすることです。メンバーには入っていませんが、イノシシを捕まえている人も知っているので、直接捕まえていく活動も一つの方法かと思っています。

(アドバイザー) 今回はスタートアップなので1年間の計画ですが、長くなる活動のように思います。今後の見通しはありますか。

(申請者) やってみて、うまくいったイベントは来年も続けながら、さらに増やして発展していきたいです。

(アドバイザー) イベントのリピーターを増やしていくのは大事なことです。

(アドバイザー) 採択された後に事務局と話し合っていかれたらと思うのは、今、個人事業主という形で人件費を出す申請書になっています。それが本当に人件費なのか、委託なのか。団体化されるのであれば労働契約を結んだり、労災の保険を導入したりといった必要性が出てきますので、ご相談されてください。

(2)カラフルマインド実行委員会

【申請者から事業の説明】

(アドバイザー) この教室が継続していくと、対象となる子どもたちはどうなっていってほしいという期待がおりますか。

(申請者) 不登校のお子さんたちは、いじめなど不都合なことが起こりやすくなっていると思います。気持ちを伝えられなかったり、感情をうまくコントロールできなかったりすると思うので、自己表現力を身に付けてもらって、なるべく周りとうまく過ごせるようになってほしいと思っています。

(アドバイザー) 申請書の中にあったチラシは1日限定でしょうか。継続を見込んで始めるのは今回が初の試みですか。

(申請者) はい。

(アドバイザー) 今3人の方がメンバーですが、今後はこの取組にもっとこんな人を必要としているとか、こんなことにまで活動を広げていきたいという願いはありますか。

(申請者) 現在子育てされているお母様方とつながって、一緒に活動できれば、現在進行形の子育ての悩みなども教えていただくこともたくさんあるかと思います。

(アドバイザー) 市役所に協力してほしいことはありますか。

(申請者) 生駒に来て日が浅いので、どんな場所や活動を知ればいいのか教えてもらいたいです。また、生駒の小・中学生の具体的な問題をお伺いしたいです。

- (アドバイザー) 活動については、特に何も質問等はありません。ただこれは、公益活動に関する補助金になりますので、地域や社会の課題の捉え方について少し助言させてください。活動背景として、子どものSNSの使用時間と不登校の関連性を挙げられていますが、少し注意が必要です。集中力の欠如とスマホの長時間使用は関係しているとは思いますが、自己表現力の低下とスマホの関連性は今回の資料には提示されていません。この事業は集中力ではなく自己表現力を高めるというところですので、今後はその部分の提示が必要だと思います。
- (アドバイザー) これまでの生駒での活動がないということですので、最初のアピールをどうするかということが課題だと感じました。長野で実践されたときは、何人ぐらい参加されて、どう公募されましたか。
- (申請者) 一度に15人から20人ぐらいです。チラシとホームページと、友人の口コミによって広がりました。
- (アドバイザー) 最初は口コミが大事だと思うので、生駒でそんな繋がりを持っている人を見つけて、お母さんたちのネットワークに入り込めるようなルートが見つければと思います。事業収入は、材料費も込みですか。
- (申請者) はい。アルバイトさんは多分学生さんになると思います。平日クラブは、1人でできると思います。
- (アドバイザー) 1人だと急に風邪を引いたりするとできなくなったりするので複数でできるような体制を取れるようにしておくのがいいと思います。
- (申請者) シュタイナーという名前を出したほうがいいのかどうかは、どう思われますか。
- (アドバイザー) 地域性だと思います。生駒は、教育熱心な方も多いと思うので興味を持たれるかもしれませんが、広がりという観点からは伏せた方がいいかもしれません。
- (アドバイザー) 生駒における不登校の問題っていうのは今どんな状況になっているのですか。
- (事務局) 全国的な傾向と同様にコロナ禍を経て不登校児童は増えているという状況にあるようです。不登校児童を取り組みも力をいれています。

4 その他 採否にかかるアドバイザーからの助言(以降、会議は非公開)

(1) 正田耕一氏

- ・獣害を防ぎたいというニーズと、里山が手入れされずに荒れているという社会課題を結び付けられており、公益性が意識されている。個人所有の耕作放棄地や里山整備は公益性の論点が難しいが、個人の土地が連なって里山が構成されているため、一つひとつの土地に手を入れることが地域全体の公益につながっていくものであると考える。
- ・今は少人数で始める活動であっても、より多くの人を巻き込んで大きなプロジェクトへと広げていく活動イメージを持っていただきたい。
- ・この活動がなければ出会わなかった方々が出会うといったコミュニティ形成にも活かしてもらいたい。会社をリタイアした人たちの生き方のモデルにもなるのではないか。

- ・各地で同様の取組はすでに行われているため、事業の独自性や先駆性は高くない。しかし、地権者や地域の方々とトラブルが起こる可能性があるということも事例として共有できている状態であるので、事務局からのサポートがしやすい活動ではある。
- ・どこで事業収入を得るのか、どのように継続していくかの視点を持っていただきたい。

(2)カラフルマインド実行委員会

- ・社会課題と自己実現の折り合いがまだついていないように見受けられる。
- ・子どもたちが自分に応じた場所を選択できる状態があるということが重要である。繊細な子どもたちが自己を発露するという観点からいくと、こういった教室は役に立つこともある。
- ・不登校という問題は地域の課題ではなく、時代の課題。それに補助金の事業として取り組むには、課題を把握することと仲間を増やす必要がある。不登校の問題に取り組んでいる団体や機関とつながることも必要。課題を解決できるための座組を整えていかななくてはいけない。
- ・活動を自宅で行うと、チラシを配ったところで知ってもらうことが難しい。最初のステップとして、認知してもらうことが必要なので地縁やネットワークを活用すべきである。
- ・対象を設定しても、想定のように集まらなかったという事例もあるので、まずはスタートアップとして1年間次につながるのか試してみてもどうか。